第５章　結論

５－１　各章のまとめ

第１章では、ガーデニングがガーデナーに与える「効果」と、街に果たす「公的な役割」について述べ、ガーデナー意識が緑豊かなまちづくりへと広がりを持つための要因として「ガーデニングコンクール」の可能性について述べた。そこから、本研究の「ガーデナーコンクール応募用紙にみるガーデナーの意識特性の把握とコンクールのあり方に関する考察」という目的を導き出した。

続いて、第 2 章では、既往文献を元に一般的なガーデナーの意識特性についてタイプ分けを行った。また、第 4 章において応募用紙から記述を抜き出すためのカテゴリーの設定を行った。

第 3 章では、岐阜県の緑化行政の取り組みと、本研究の対象とする「花の都ぎふ」花かざりコンクールの概要を述べ、花かざりコンクールの現状と課題をまとめた。

第 4 章では、花かざりコンクール応募用紙を用いて花かざりコンクール一次審査通過者を庭づくりの動機と庭づくりの留意点の差から類型化し、それぞれの意識特性について考察を行った。またコンクールがガーデナー意識に及ぼす影響や一般ガーデナーとコンクール一次審査通過者の関係に関しても考察を加えた。

５－２　ガーデニングとガーデナーの公への意識

５－２－１　ガーデナー意識の多様性

4 章では、「『花の都ぎふ』花かざりコンクール一次審査通過者」という限られた対象ではあったが、庭づくりの動機と庭づくりの留意点によってガーデナーを大まかに４つ（詳細に６つ）、にタイプ分けし、ガーデナーの意識特性について考察をおこなった。これらの考察から、ガーデナータイプによって、公に対する意識に差があることがわかった。ガーデナーの意識分析の過程からみえてきた２つ視点により、ガーデナー意識の多様性についてまとめた。

まず、庭づくりの動機から、ガーデナーが庭をみる視点を「マクロ的視点」と「ミクロ的視点」に分けることができた。例えば、自分の庭に公的な役割を付加させ、景観の向上に役立ちたいと考え行動しているガーデナーや、花を通じたコミュニケーションを発生する場と認識しているガーデナーを、本研究では「マクロ的視野タイプ」と名づけた。逆に、庭づくりの取り組みが自分の庭のみで閉ざされており、自己満足の範囲でガーデニングをおこなっているガーデナーを「ミクロ的視野タイプ」とした。「ミクロ的視野タイプ」のガーデナーにとって、庭はいわば「創造の場」であるといえる。

また、ガーデナーが庭づくりにおいて重視しているものについても、大きく「景観」と「モ

ノ」に分けることができ、ガーデナーにより差があらわれた。「景観」を重視しているガーデナーは、庭全体を「作品」とみなす傾向にあり、飾り方など「見せ方」にこだわっている。一方モノを重視しているガーデナーは、花苗や果実など「モノ」そのものというよりも、「モノ」を作る過程にこだわりを持っていることが明らかになった。

これら二つの視点を組み合わせることにより、「マクロ的視野」を持ち「景観」を重視する〔地域展開タイプ〕、「マクロ的視野」を持ち「モノ」を重視する〔交流タイプ〕、ミクロ的視野を持ち「景観」を重視する〔作品づくりタイプ〕、ミクロ的視野を持ち「モノ」を重視する〔モノづくりタイプ〕の 4 つに分けることができた。また全体の集団の傾向としてはやや景観を重視していることがわかった。

５－２－２　ガーデニングの公への展開

ガーデナーの意識特性から、個人がおこなうガーデニングの公への展開について論じる。

庭づくりの動機によるガーデナーのタイプ分けから、ミクロ的視野を持つガーデナーは、「育てる喜び」や「庭の美しさから得る喜び」など、「内面的効果」をより重視する傾向にある。また、マクロ的視野を持つガーデナーは、「内面的効果」に加え、「街の景観向上」などの「外面的効果」、すなわち「公」を意識してガーデニングをおこなう傾向にある。一方「ミクロ的視野タイプ」に分類されたガーデナーの中にも、公的な意識を持つガーデナーは存在しているものの、その多くは意識のみで行動を伴っていない。個人の庭づくりが実践的に公へと展開していくためには、ガーデナーにマクロ的視野を持たせると同時に、意識から行動に移すきっかけづくりが必要であると思われる。

５－３　ガーデニングコンクールの有効性とそのあり方

５－３－１　ガーデニングコンクールがガーデナー意識に及ぼす影響

４－５では、内面的な効果を重視する「ミクロ的視野ガーデナー」が、「マクロ的視野」を持つことになる意識の変化過程に注目し、その変化に影響を与えるものとして、ガーデニングコンクールとの関連性について考察した。

まず「コンクール入賞」が、ガーデナーの公や庭づくりに対する意識に何らかの影響を与えることがわかった。具体的には「マクロ的視野タイプ」のガーデナーにはコンクール入賞によって他のガーデナーとの交流が生じたり、さらに公を意識し地域の花づくり活動へと展開していくなどの「マクロ化」がみられた（図 4-31）。

また、「ミクロ的視野タイプ」のガーデナーにはガーデナー自身の公への意識やガーデニングへの関心が強まったりするなどの効果を生む反面、ガーデナーによっては、賞をとることへの執着を強める「ミクロ化」が生じることが明らかになった。

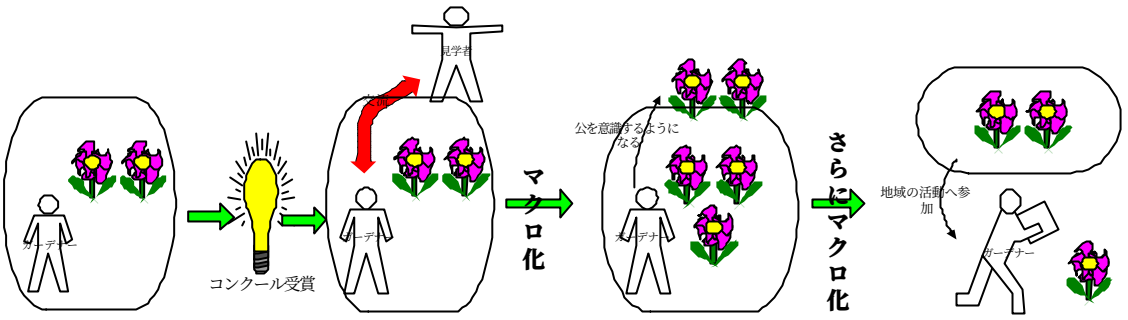

図 4-31　マクロ化の例

５－３－２　ガーデニングコンクールの限界と地域展開へ

３－２－２では、ヒアリング調査の結果から、ガーデニングコンクール開催により競い合うことでガーデニング技術の向上という効果をもたらすと述べた。しかし、本件旧で明らかになったコンクールがガーデナーに及ぼしている効果の多くは、コンクール「入賞」が与えるものであった。また、コンクール応募者が必ずしもマクロ的な視野を持つガーデナーであるとはいえない。これらは花のまちづくりにおいて、個人のガーデニング活動がコンクールをきっかけに、個人から地域へ、点から線へと、公へと広がりをみせない理由の一つであるといえる。

また、入賞者については過度の見学などにより負担をともなうことも報告されていることから、コンクールがガーデナーの意識に与える効果と同時に、その限界があることを認識しなければならない。

コンクールの限界と、現在コンクールが抱える様々な課題点から、今後のコンクールのあり方について検討していく。そこで「マクロ化」がおこる過程に注目する。マクロ化の図からもわかるように、入賞に伴い、入賞物件の周辺住民や見学者の反応がガーデナーを励まし、よりマクロ的視野へと向けさせている。マクロ的タイプのガーデナーも周囲の反応や交流を動機としている。この周辺との交流、ガーデナーと地域との密着こそが、今後のコンクールのあり方を検討するうえで大いに重要であると思われる。

ガーデナーと地域との密着を考えた場合、その「密着度」を計るものさしとして、ガーデナーを取り巻く地域住民の反応は大変参考になると思われる。そこで、「地域密着型ガーデニングコンクール」を提案する。全国や都道府県など広い範囲を対象とするのではなく、ガーデナーの「顔」が見える市町村単位や地区で開催し、地区住民が投票形式で優秀なガーデナーを選出するなど、より地域に根ざしたコンクールをおこなう必要があるのではないだろうか。また、コンクールに限らず、地域の中で注目されるガーデナーを広報誌で紹介したり、ガーデナー同士の交流を目的とした地域イベントを開催するなど、ガーデナーと地域との接点をつくる「しかけづくり」は、住民参加による花と緑のまちづくりを進めていくうえでも重要である。今後は、行政や花と緑の推進センターが、そのような情報の媒介役やイベント主催者として、現在よりも一層花のまちづくりの中心的な役割を果たし

ていくことを提案する。そして、身近にある花と緑から始まる交流が、次第と住民参加を促し、「テーマコミュニティ」づくりのきっかけとなることを期待したい。

５－４　ガーデニングとライフスタイル

本研究においてガーデニングコンクールとガーデナー意識について調査していく中で、昨今のガーデニングブームやコンクールでは「見かけの美しさ」が一人歩きし、庭の「作品化」が起こっていることを強く感じた。庭づくりが庭づくりのみで終わり、生活と切り離される現象が生じつつあるのである。近年のガーデニングブームを、「基本を忘れた花かざり現象」と批判する声もある。そういった現象からか、「ガーデニングが嫌い」という人もいるという。しかし、庭やガーデニングは私たちの生活環境を外面的に潤すだけでなく、精神的な世界や生活にも潤いを与えるものでもある。私たちは、もう一度ガーデニング本来の意味をみなおし、ガーデニングとライフスタイルの関係を考える必要があるだろう。

５－４－１　本来の庭が持つ意味

民俗学によれば、「ニワ」とは本来「作業場」という意味を持つという[1)]。母屋の前の広場だけでなく家の中や土間も庭と呼ばれており、そこに季節ごとの収穫物をムシロに広げ天火に干したり、穀物の脱穀調整やもちつき、縄ない、ワラ仕事をする場であった。農家の多くの仕事はそれゆえ「ニワシゴト」と呼ばれていた。「ニワ」とは生産と生活のための作業空間であり、ときに母屋よりも大事な場所であった。

しかし、時代とともに、庭の担う役割は変化してきた。ニワは「仕事場」から、花を飾る場所、家を彩る場所として、家の付属物のようになった。美しい花が咲き乱れる庭のある家は一種のステータスのようにもなっていた。「基本を忘れた花かざり現象」といわれる所以も、こういった世間の流れが根底にあるといえる。

ただ、もちろん、現代のガーデナーの中にも花や庭から美しさから以外から満足感を得ているガーデナーは存在している。本研究では、庭で実用作物を栽培するなど、庭づくりにおいて「モノ」を重視しているガーデナーの存在を明らかにした。彼女たちは、庭に花を植えるばかりでなく、ハーブや野菜を育て、お茶を楽しんだり、食卓で味わうなどの「楽しみ」を見つけていた。また、収穫したものを近所の人と分け合うなど、庭で採れた作物や花苗などの「モノ」がコミュニケーションの媒体としての役割も果たしていることがわかった。今や都市では、「見てくれ」だけのガーデニングを卒業し、花園を菜園に切り替える住民も増えているという。それでも物足りない人は、市民農園やクラインガルテンなどを借り、農業を楽しんでいる。自然に触れる喜びとともに、自分で作った野菜を食べる喜びは想像以上に大きく、それらは昨今の健康指向ブームにおされ、にわかに流行になりつつある。庭は、少し前まで当たり前のようにあった「自然」や「自給生活」と私たちを結びつける接点にもなっている。「ガーデニング」から「ファーミング」へと、時代の流れは「モノ」へと向きつつあるのかもしれない。

５－４－２　エコ・ライフスタイルへの転換

そして、そういったガーデニングとライフスタイルの関係からは、環境問題解決への糸口も探ることができる。ガーデナーにとって、庭は季節や植物、虫などを通じて自然を身近に感じることのできる場であり、ガーデニングはそのような自然の大切さや偉大さを考える行為ともいえる。ガーデナーへのヒアリング調査や応募用紙においても、「自然の大切さ」や「無駄遣い」、「リサイクル」などという言葉が何度も登場した。ガーデナーの中には、ガーデニングをとおして、生命力や資源の尊さを感じることから「身近な環境問題」に気づき、楽しみながら「エコ・ガーデニング」を実践しているガーデナーが存在しているのである。

ガーデナーの多くは主婦層であり、「地球環境問題なんてむずかしいわ。」という人ばかりである。しかし、「好き、楽しい」という気持ちを出発点として身近な生活環境について触れ、その過程で少しずつ問題を認識し、そこから、ごみや食へと関心が広がる可能性は大いにあると思われる。ガーデニングには「エコ・ライフスタイル」への転換へのヒントが大いに隠されているのである。ガーデニングのような趣味や文化、そしてライフスタイルに根付いた身近な環境問題への一人一人の取り組みこそが、地域環境問題、ひいては地球環境問題解決への一番の近道なのではないだろうか。

５－５　今後の課題

本研究では「『花の都ぎふ』花かざりコンクール」の一次審査通過者を対象とし調査分析をおこなった。しかし、コンクールのあり方についてより詳細に論じる上では、コンクール一次審査通過者のみならず、応募者全体や応募しないガーデナーの意識特性の把握も必要であると思われる。

また、本研究では主に「応募用紙」をガーデナーの意識分析の対象とした。しかし「文章」から読み取ることができる意識についてはやはり限界が生じてしまう。そのため、より詳細なヒアリング調査やアンケート調査などを行い、さらに明確な意識を導き出すことが必要であると考える。

〔引用文献〕

１）現代農業，社団法人，pp.49 農山漁村文化協会（2000）

〔参考文献〕

１）井口百合日:花と緑のまちづくりを女性庭師たちの手で,都市計画，214 47（3），35-38 (1998)

２）杉尾邦江:ニュージーランド・クライストチャーチに於ける私有地緑化（ホームガーデン）の実態（その２）－ニュージーランド人と日本人の住宅庭園景観に対する意識について，PREC STUDY REPORT，4，46-57（1999）
３）有路信ほか:座談会「コミュニティー・ランドスケープと住まいの緑」,ランドスケープ研究，62（1），7-21（1998）
４）真鍋千恵子:事例報告７　下町の緑の実態と効用～街と人とを緑がつなぐ,ランドスケープ研究，62（1），42-44（1998）
５）輿水肇:コミュニティー・ランドスケープと緑のまちづくり,ランドスケープ研究,62（1），3-6（1998）
６）高野基樹・柴田久・土肥真人:公私空間の境界部に対する意識と形態に関する研究－世田谷区域を事例に－,都市計画学会論文集，34，451-456（1999）
７）上甫木昭春:居住環境形成に資する戸建て住宅地に庭空間の公的役割に関する研究,ランドスケープ研究，61（5），793-796（1998）
８）坂本磐雄・山口紘・田中正美・前田修:小都市の居住地緑化事業における緑化コンクールの効果と課題　－沖縄県平良市と北九州市の比較を通して－,都市計画学会論文集,29,355-360(1994)
９）川根あづさ・愛甲哲也・浅川昭一郎:北海道恵庭市恵み野を事例とした住民の庭づくりに対する意識と取り組みについて,ランドスケープ研究，63(5)，695-700（2000）
10）林まゆみ・塩谷元宏・? 京緑:ガーデニング愛好者にみられる緑豊かなまちづくりへの活動とその促進要因,環境情報科学論文集，14，85-90（2000）
11）花の都ぎふ花と緑の推進センター http://www.pref.gifu.jp/center/top/page6.htm
12）菅民郎：すべてがわかるアンケートデータの分析,現代数学社（1998）
13）内田修：すぐわかる SPSS によるアンケートの調査・集計・解析,東京図書（1997）
14）P.G.甫エール著,浅井晃,村上正康役：初冬統計学　原書第 4 版,培風館（1981）